

# 仏教と律令国家

— かながわの古代寺院を考える —

神奈川県教育委員会文化遺産課

久光孔一郎

## はじめに

神奈川県内では旧石器時代から近代まで 8,000 件以上の遺跡が周知されています。本講座では、そのうち古代の寺院跡を中心として紹介します。畿内から始まった寺院造営が地方へと波及する様子を確認するとともに、当時新来の宗教であった仏教がどのように広がっていったのかを考える機会にしたいと思います。

## 1. 律令国家と仏教

### (1) 対象とする範囲

- 地域：現在の神奈川県
- 時代：飛鳥時代後半～奈良時代中頃（7世紀後半～8世紀中頃）  
→東アジア情勢の緊張を背景とし、律令に基づく社会体制が整備された時代

### (2) 律令国家とは

- 律令制以前の国家体制：実際の統治は在地の有力豪族が行う  
→王権による「くにのみやつこ国造」を通じた間接的支配
- 律令国家体制：  
隋・唐の制度に倣った中央集権体制の導入  
→「公地公民」を前提とした戸籍・税制の整備  
官僚制、官道・駅制を整備し、中央政府の決定を文書によって伝達、実行  
→豪族はぐんじ郡司として体制内に組み込まれる

### (3) 律令国家のなかの仏教

- 7世紀：古墳築造の収束 ※大化のほくそうれい薄葬令（7世紀中頃）との関連  
→寺院が建立されるように
- 地方における寺院数の増加  
→郡司層（豪族）が主要な役割を担ったと考えられる
- 「詔。諸国每家作仏舎、乃置仏像及経、以礼拝供養。」  
（『日本書紀』天武天皇 14 (685)年条)

- 天平 13 (741)年 国分寺建立の詔  
「天下諸国各令敬造七重塔一区、并写金光明最勝王經、妙法蓮華經一部。」(『続日本紀』)  
社会不安や疫病流行を背景とし、仏の力で国を守護
- 天平 19 (747)年 国分寺造営督促の詔  
滞る造営に対し、郡司層に造営の主体を移すことを指示 →本格的な造営が始まる
- 仏教はどのように受け容れられ、広がっていったのか？  
→ かながわの古代寺院を対象とし、考古学の視点から考える

## 2. 仏教伝来と古代世界の文化交流

### (1) 仏教と文化の伝播

- 紀元前 6 世紀頃、現在のインドで成立  
→ 中国や朝鮮半島を経由し、6 世紀半ばに日本列島に伝わる
- 蓮華文、パルメット文、唐草文等の文様：地中海世界に起源を持つと言われる
- 仏像：アレクサンドロス大王の東方遠征（紀元前 4 世紀）の影響を強く受ける  
南アジアにもたらされたヘレニズム文化と仏教が融合して生まれた

⇒ 地中海世界から東アジアにわたる文化交流、その終着点のひとつが日本列島

### (2) 6～7 世紀東アジアにおける仏教

- 南朝 梁：武帝（在位 502～549 年）が仏教を保護・振興  
都の建康（現在の南京）には多くの寺院が建立される
- 百済：聖王（在位 523～554 年）が梁に朝貢、仏教を含む南朝文化を吸収  
梁の年号「大通」に由来する大通寺を建立
- 倭（日本）：百済から招聘した技術者により飛鳥寺を建立（6 世紀末～7 世紀初頭）  
百済の滅亡（660 年）、高句麗の滅亡（668 年）により緊迫する東アジア情勢  
⇒ 日本では中央集権化を推進  
庚午年籍（670 年） 藤原京遷都（694 年） 大宝律令の成立（701 年）  
仏教に鎮護国家の役割が期待されるように
- 飛鳥寺からはじまった寺院造営 → 次第に畿内から地方へと波及  
⇒ では、かながわではどのような様子がみられるのか？

### 3. 考古学から見る古代寺院

#### ○ 古代寺院跡の特徴

- 発掘調査によって確認される古代寺院：「礎石」「瓦」が手掛かりとなる
- 瓦：屋根に葺くため、粘土を一定の形に整形・焼成したもの  
風雨・火災に強く、建物を視覚的に荘厳する効果  
寺院の屋根材として、仏教に伴って導入  
→藤原宮の造営（7世紀末）までは、寺院にのみ用いられた  
軒先の瓦は仏教の象徴である蓮華の文様で飾られる
- 瓦葺きの屋根は重く、それを支える土台が必要  
→柱が地面に沈まないようにするため、礎石を用いる
- 木材と異なり、瓦・礎石は土中でも分解されずに残る

### 4. かながわの古代寺院

#### ○ 本講座における着目点

- 国分寺の創建（8世紀中頃）までの古代寺院について
  - ・ 周辺遺跡との関連（道路、地方官衙、瓦窯）
  - ・ 創建時の瓦、遺構に着目

- 神奈川県域では早い時期から開発が盛ん  
→調査が及ばないまま消滅してしまった遺跡も多い

#### ○ 律令制以前のかながわ

- 相模地域は鎌倉別、相武国造、師長国造の3領域に分けられる  
鎌倉別：鎌倉～三浦半島  
相武国造：相模川流域  
師長国造：西湘地域
- 武蔵国造：横浜・川崎を含む地域
- 在地の豪族が支配する国造の領域  
→7世紀の中央集権化にともない評（のちの郡）に分割

#### (1) 影向寺遺跡

- 川崎市宮前区（武蔵国橘樹郡）多摩川右岸の段丘上に立地
- 同一丘陵上の東方には橘樹郡衙に比定される千年伊勢山台遺跡（高津区）が展開  
南方には現在の中原街道に相当する主要交通路が通っていたと考えられる

- 金堂は現在の薬師堂と同一の位置
- 金堂西側から「无射志国荏原評」と郡名が記された瓦が出土  
「評」は大宝令（701年）で「郡」に改められる前の表記  
⇒7世紀後半には寺院の造営が開始  
評を越えた瓦の供給

## (2) 弘明寺遺跡

- 横浜市南区（武蔵国久良郡）
- 昭和5年に湘南電気鉄道が開通、古くから開発が進む  
現在の弘明寺の周辺で平瓦が採集  
→仏堂の存在が想定されるが遺構は未発見
- 平瓦の製作技法（桶巻作り）から年代は国分寺以前
- 未発見の久良郡衙も周辺に存在する可能性

## (3) 宗元寺跡

- 横須賀市（相模国御浦郡）房総半島へ繋がる古東海道沿い、交通の要衝に立地
- 現在は近世初頭に再建された曹源寺が存在
- 早くから宅地化が進行、旧制横須賀中学校の建設により一部が削平  
→伽藍配置を推定するに足る遺構が見つからない  
採集された瓦の散布状況から寺院跡の範囲を推定
- 創建期のパルメット紋軒丸瓦の一部は西安寺跡（奈良県王寺町）と同範  
範：文様を施すための木型  
↔瓦の製作技法は異なり、全面的な技術の供与はみられない
- 近隣の公郷瓦窯、石井瓦窯で創建瓦を生産
- 天平7(735)年『相模国封戸租交易帳』に  
「従三位山形女王食封御浦郡走水郷五十戸」等の記載  
→周辺は王権と深い繋がりを持つ地域と考えられる

## (4) 下寺尾廃寺

- 茅ヶ崎市（相模国高座郡）相模川下流左岸  
高座郡衙とされる下寺尾官衙遺跡の南西の台地裾に立地
- 伽藍中枢の北東隅に基壇建物（推定金堂）、  
西端に大型掘立柱建物・礎石建物（推定講堂）  
塔は未確認

- 南方では小出川と駒寄川が合流  
津や祭祀の場の存在が明らかに → 寺院の隣接地で律令祭祀（水辺の祭祀）を実施

## (5) 千代廃寺

- 小田原市（相模国<sup>あししも</sup>足下郡） 千代台地上に立地
- 北方には永塚遺跡群・下曾我遺跡といった中心的な遺跡が展開  
足下郡衙と、森戸川に面した津の存在が想定
- 昭和 23～26 年、千代中学校の土取り工事の際に多数の瓦が採集
- 中世以来多くの改変を受けており、遺構は明確でない
- 創建時の瓦はからさわ瓦窯（足柄上郡松田町・相模国足上郡）で生産  
→ 瓦の生産年代は 8 世紀前半頃
- 同様の特徴を持つ瓦は大磯町の吹切遺跡（<sup>よろぎ</sup>余綾郡）からも出土  
同地にも古代寺院が存在した可能性がある
- 「大伴五十戸」と記された軒丸瓦が出土  
「<sup>きと</sup>五十戸」は「郷」の古い表記

## (6) 相模国分僧寺跡

- 海老名市（相模国高座郡） 相模川左岸の段丘上に立地
- 伽藍は東に金堂、西に塔をもつ法隆寺式伽藍配置
- 8 世紀中頃に造営が本格化  
北方にはやや遅れて国分尼寺が造営される
- 塔跡からは水煙<sup>すいえん</sup>が出土
- 創建瓦は<sup>のりごし</sup>乗越瓦窯（横須賀市）で生産  
相模湾・相模川・目久尻川の水運を利用していたと考えられる
- からさわ瓦窯の丸・平瓦や、宗元寺周辺で生産された平瓦が出土  
⇒ 郡司層の協力を得た生産体制
- 武蔵国分寺、下野国分寺など：郡名を記した瓦が多く出土  
→ 郡が造寺に関与したことが読み取れる  
⇔ 相模国分寺では同様の瓦はみられない

## ○ かながわの古代寺院からわかること

- いずれも交通の要所に立地、郡衙と隣接する事例も多い
- 国分寺以前の寺院：旧来の国造領域内で瓦を生産・供給  
→軒丸瓦の文様は各寺院で全く異なる  
郡司層が主体となって建てられたと考えられる  
⇔その性格については氏寺説、官寺説等諸説あり
- 国分寺創建段階：国造領域を超えた瓦の供給  
国分寺造営のため、各地域の郡司層が協力した様子がみられる
- 国分寺建立の詔の趣旨からして、国分寺は塔が重視される  
→金堂より先に塔を造営している場合、詔の思想をよく理解していた可能性がある
  
- 伽藍配置がわかる例や、手掛かりとなる文字資料等に乏しい  
→他の地域と比較し、具体的な検討を加えることが難しい  
今後の調査・研究の進展が待たれる

## 5. 国分寺建立以降の展開

- 平安時代以降、村落内寺院の出現  
→民間にも造寺運動が広がる
- 火葬墓<sup>かそうぼ</sup>の広がり→仏教思想の浸透を示唆
  
- 地方寺院の多くは、律令体制の弛緩と社会の変化に伴い 10 世紀頃には多くが廃絶  
⇔地方への仏教波及の第一波として一定の役割を果たした

---

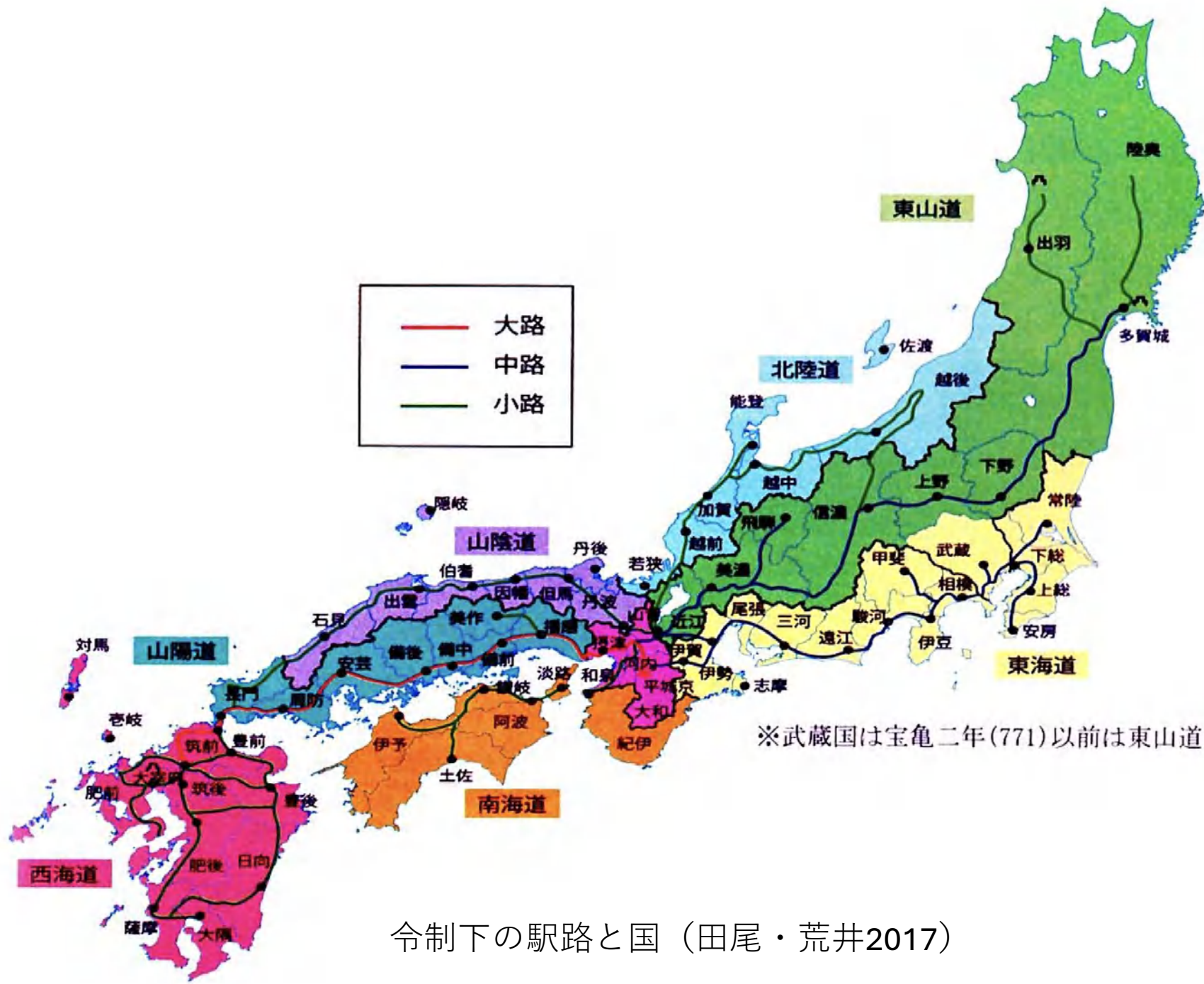
## おわりに

ここまで神奈川県内の古代寺院の様相をみてきました。本日取り上げた内容は、これまでの発掘調査成果の積み重ねによって判明したものですが、中には高度経済成長期以前の開発等によって大部分が消滅してしまったと考えられる遺跡もありました。遺跡は一度失われると戻ることはありません。地域の大切な歴史を守り伝えていくため、神奈川県や各市町村で行っている埋蔵文化財保護にご理解とご協力を賜れますと幸いです。

---

## 参考・引用文献

- 浅井希 2022 「相模国分僧寺の造営年代と造瓦組織について」『国土舘考古学』第9号
- 上原真人 1996 『蓮華紋』日本の美術 第359号
- 王寺町 2023 『西安寺跡発掘調査報告書—舟戸神社境内編—』王寺町文化財調査報告書 19
- 大村浩司 2017 「相模国高座郡家と下寺尾廃寺—下寺尾官衙遺跡群の調査と保存—」佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 岡本孝之・國平健三・田代昭夫 2001 「弘明寺の古瓦」『神奈川考古』第37号、神奈川考古同人会
- 神奈川県立歴史博物館 2008 『瓦が語る—かながわの古代寺院』
- かながわ考古学財団 2010 『小出川河川改修事業関連遺跡群 茅ヶ崎市七堂伽藍跡(2) 小出川河川改修事業に伴う発掘調査Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 251
- 小田原市教育委員会 2009 『永塚遺跡群と下曾我遺跡—川辺に営まれた地域拠点—』小田原の遺跡探訪シリーズ4
- 小田原市教育委員会 2017 『千代寺院跡文化財調査報告書』小田原市文化財調査報告書第182集
- 川崎市教育委員会 2014 『橘樹官衙遺跡群の調査：橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書：神奈川県川崎市』川崎市埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2019 『京瓦-生産者の足跡-』京都市文化財ブックス第33集
- 河野一也 1997 「相模国の初期寺院」『関東の初期寺院』関東古瓦研究会
- 河野一也 1998 「相模国分寺」関東古瓦研究会編『聖武天皇と国分寺—在地から見た関東国分寺の造営—』雄山閣
- 國學院大學考古学資料館 2002 『國學院大學考古学資料要覧 2001 徳富蘇峰旧蔵資料』
- 栗田一生 2017 「武蔵国橘樹郡家と影向寺遺跡」佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』、山川出版社
- 栗田一生 2025 「影向寺の創建瓦」関東古瓦研究会編『関東の初期寺院—創建瓦の系譜と伝播—』
- 国分寺市教育委員会 2017 『古代道路を掘る—東山道武蔵道の調査成果と保存活用—』
- 田尾誠敏 2017 「相模国における官衙・初期寺院の景観とその形成」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 田尾誠敏・荒井秀規 2017 『古代神奈川の道と交通』藤沢市文書館
- 高橋香 2025 「千代廃寺・宗元寺の創建瓦」関東古瓦研究会編『関東の初期寺院—創建瓦の系譜と伝播—』
- 茅ヶ崎市教育委員会 2013 『下寺尾官衙遺跡群の調査 下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 40
- 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1994 『東海道の国分寺—その成立と変遷—』
- 奈良文化財研究所 2022 『薬師寺東塔発掘調査報告』
- 花谷浩 2000 「3 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」奈良国立文化財研究所編『古代瓦研究Ⅰ』
- 広島県立歴史博物館 1994 『日本のなかのアジア文化—漢字・南画・仏像—』
- 山崎信二 2011 『古代造瓦史—東アジアと日本—』雄山閣
- 山中敏史 2003 『古代の官衙遺跡』Ⅰ遺構編
- 森郁夫 1991 「わが国古代寺院の伽藍配置」『京都国立博物館学叢 13』京都国立博物館



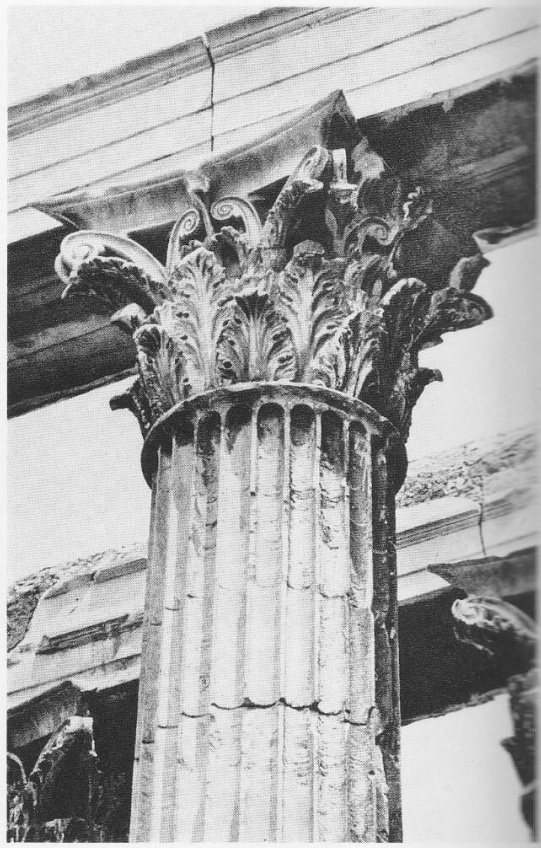
令制下の駅路と国 (田尾・荒井2017)



東山道武蔵道の遺構  
(国分寺市教育委員会2017)



▲第42図 インドの柱頭  
(パータリプトラ王宮 バトナー博物館)  
高約1m マウリア朝 紀元前2世紀



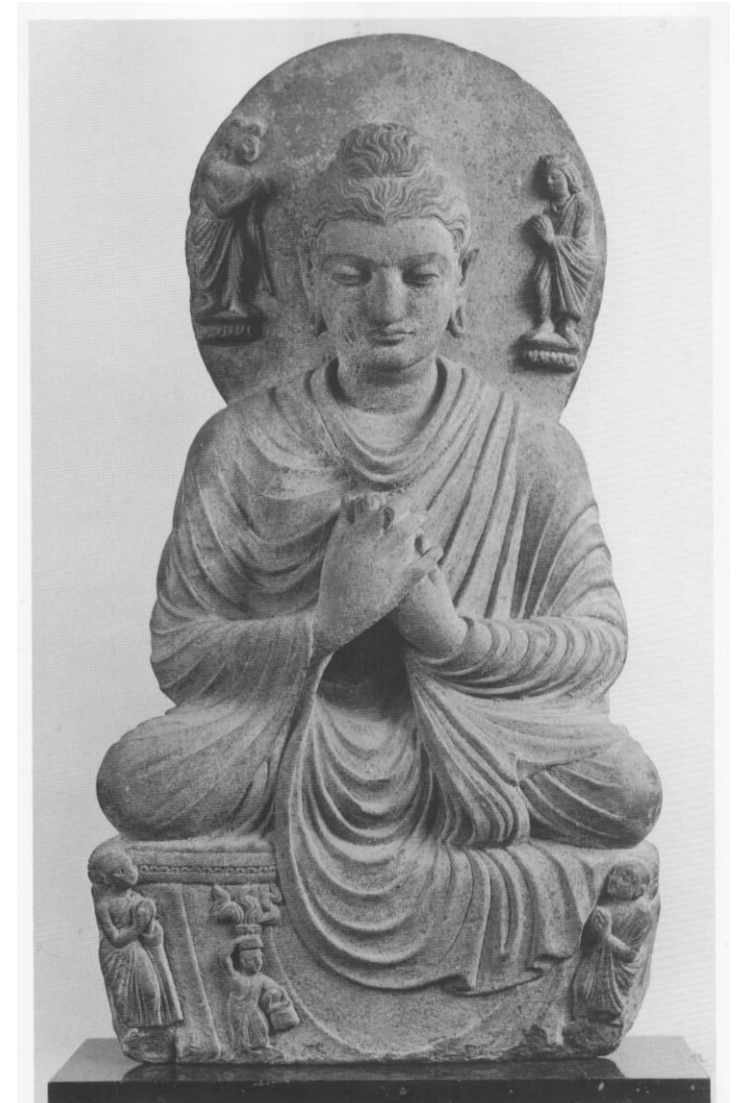
▶第41図 ギリシャの柱頭(コリント式)  
紀元前4世紀



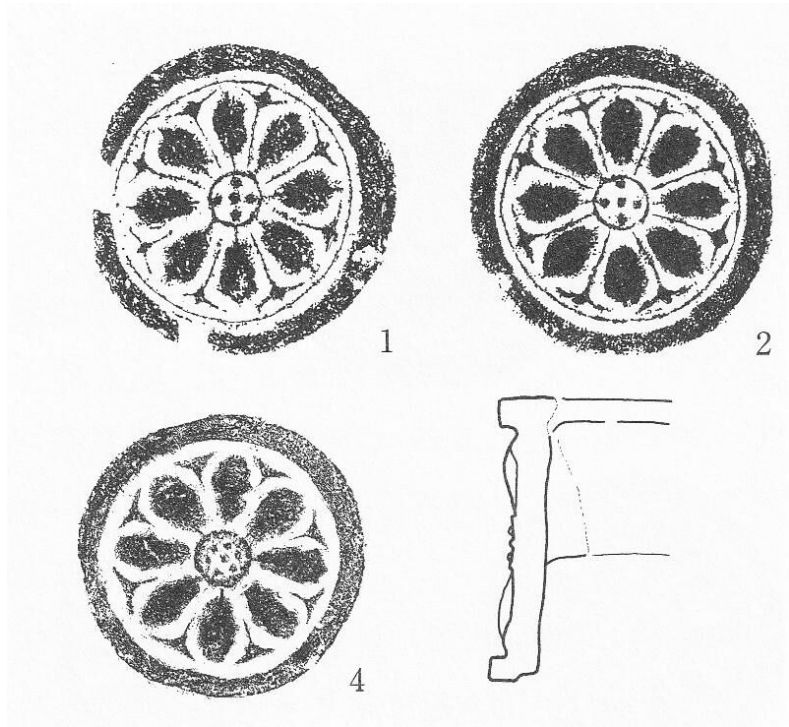
◀第43図 隅木蓋瓦  
(和歌山 上野瀬寺 奈良国立博物館)  
高21.8cm 7世紀末



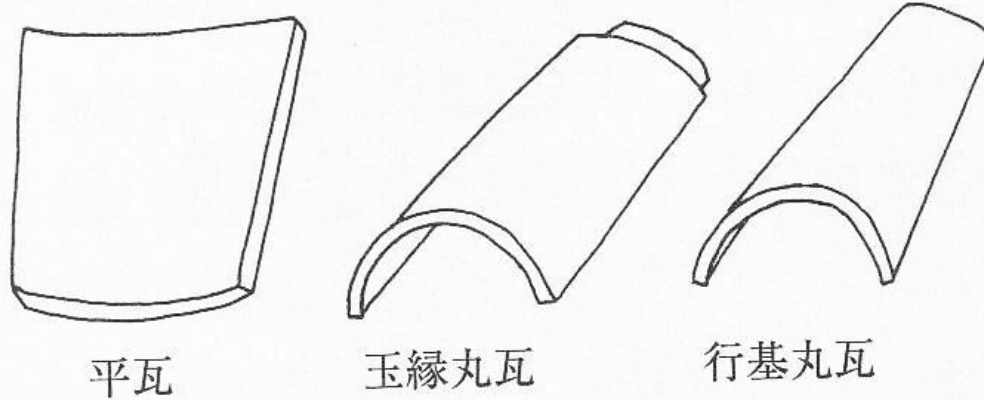
仏教に関連するモチーフ (上原1996)



石造如来坐像 ガンダーラ、2~3世紀  
(広島県立歴史博物館1994)



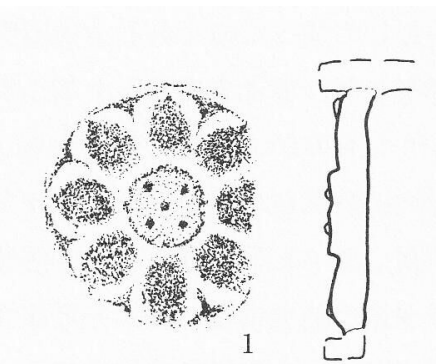
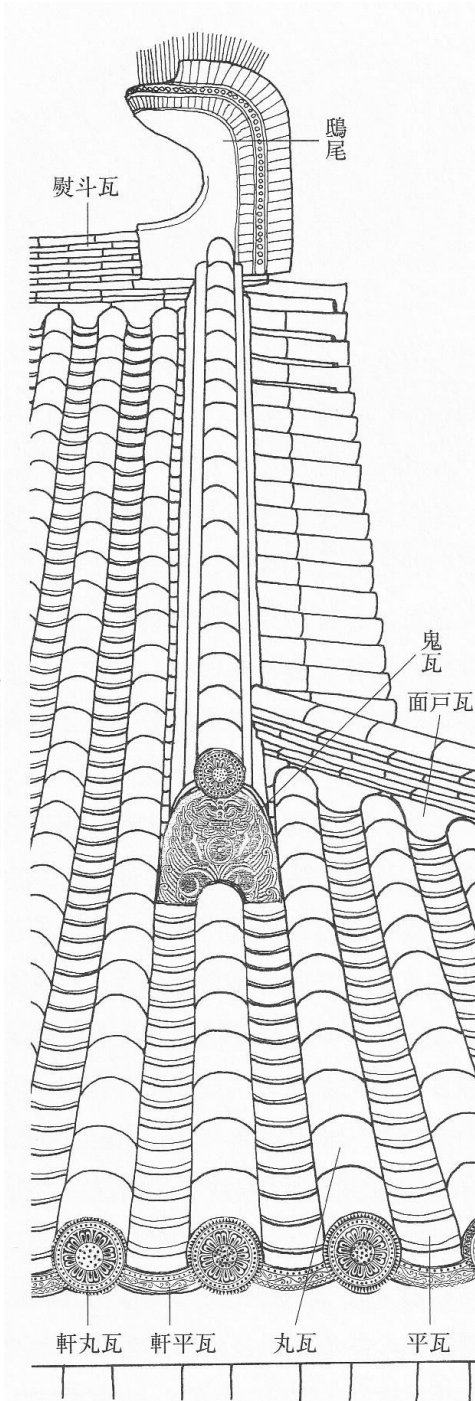
梁の軒丸瓦 (山崎2011)



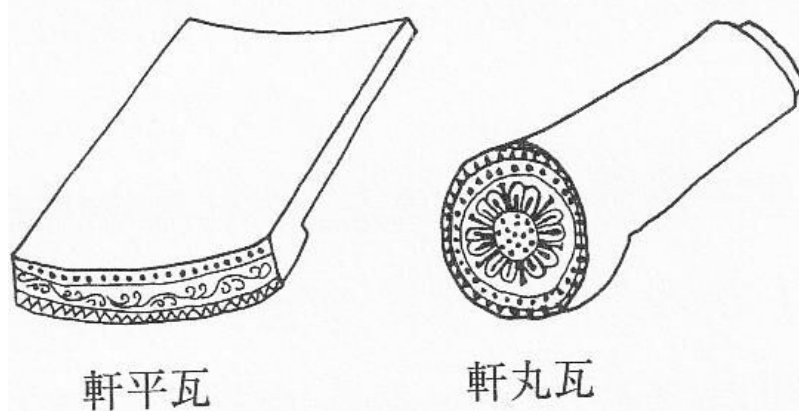
平瓦

玉縁丸瓦

行基丸瓦



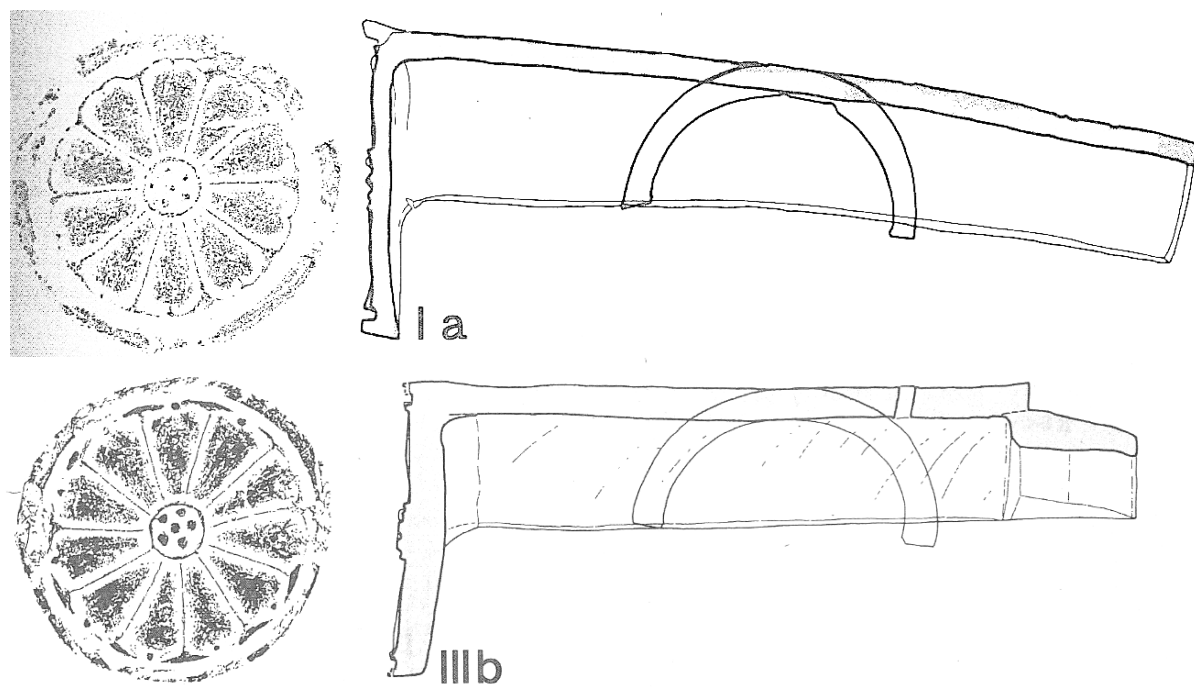
百済・大通寺の軒丸瓦 (山崎2011)



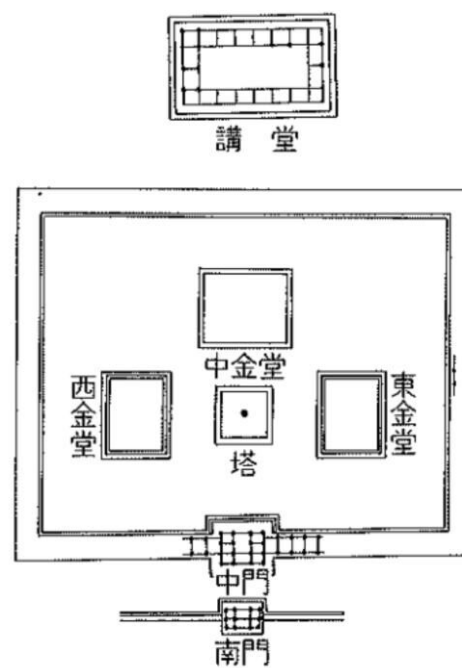
軒平瓦

軒丸瓦

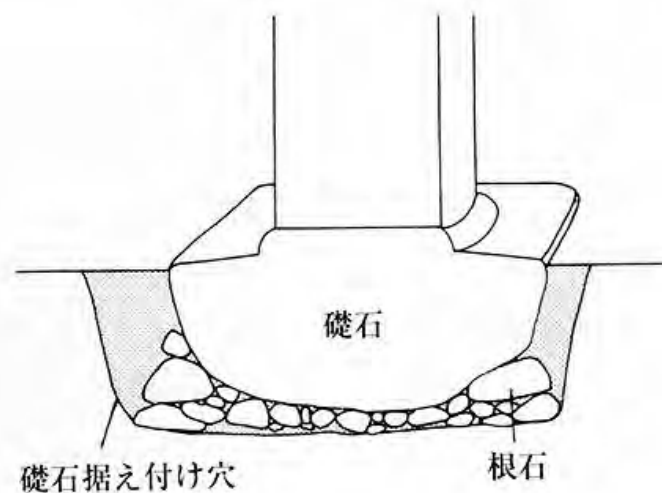
瓦の種類と使用場所 (山崎2011)



飛鳥寺の軒丸瓦 (花谷2000)



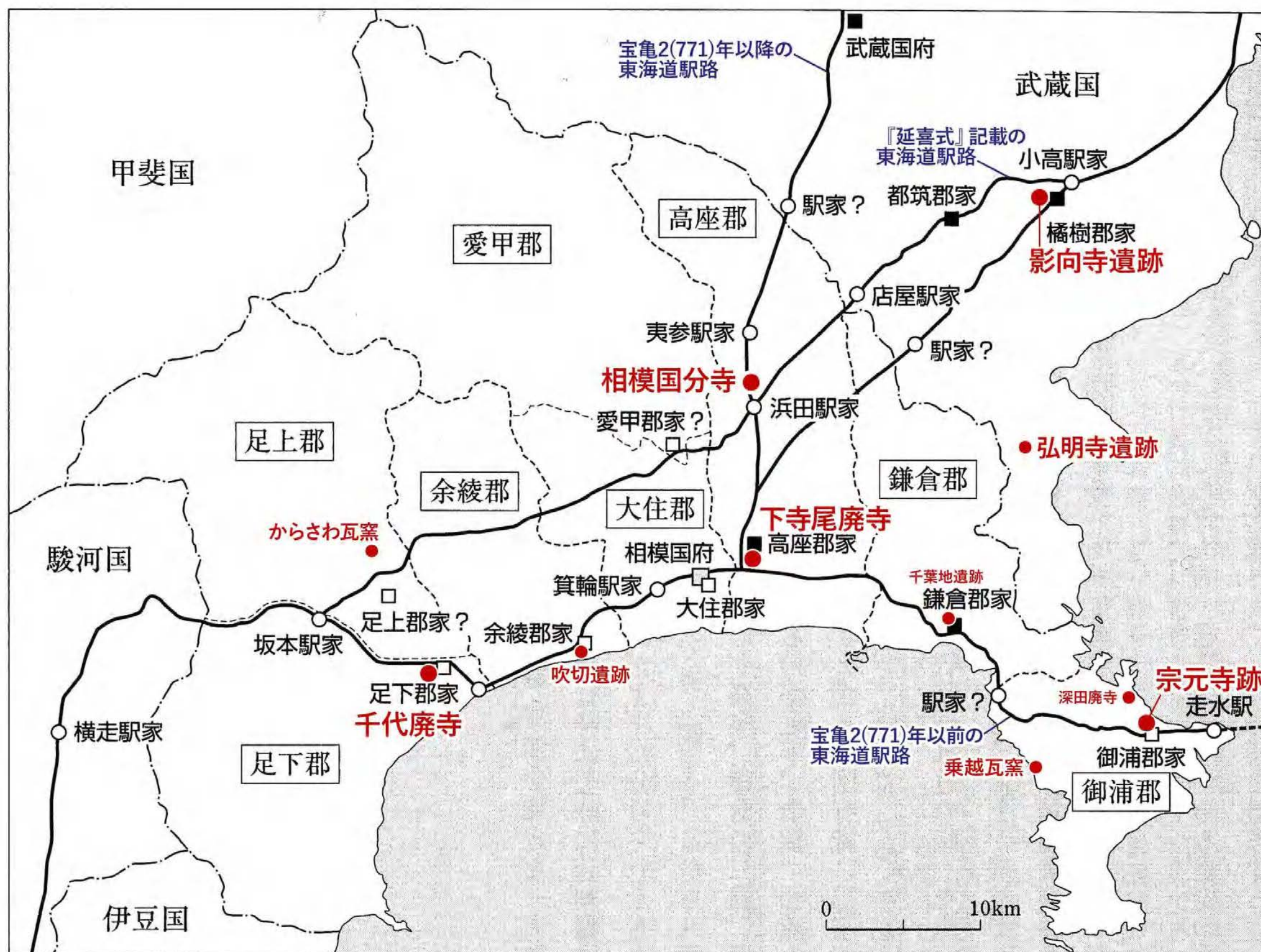
飛鳥寺の伽藍配置 (森1991)



礎石 (山中2003)



相模地方の国造と支配領域（田尾2017）

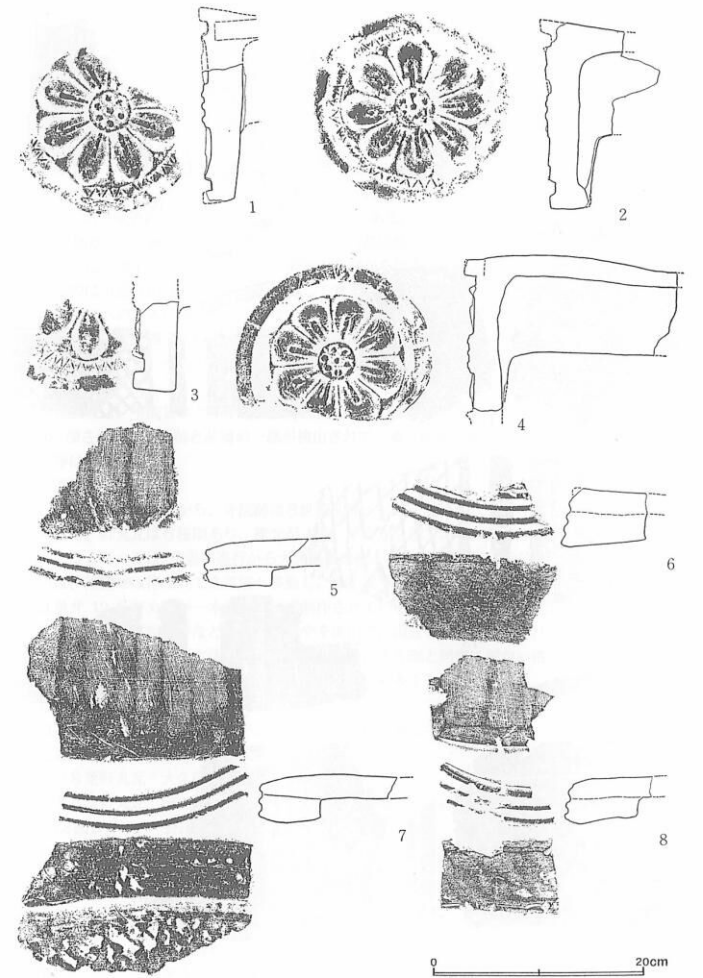


相模国の古代寺院と関連遺跡

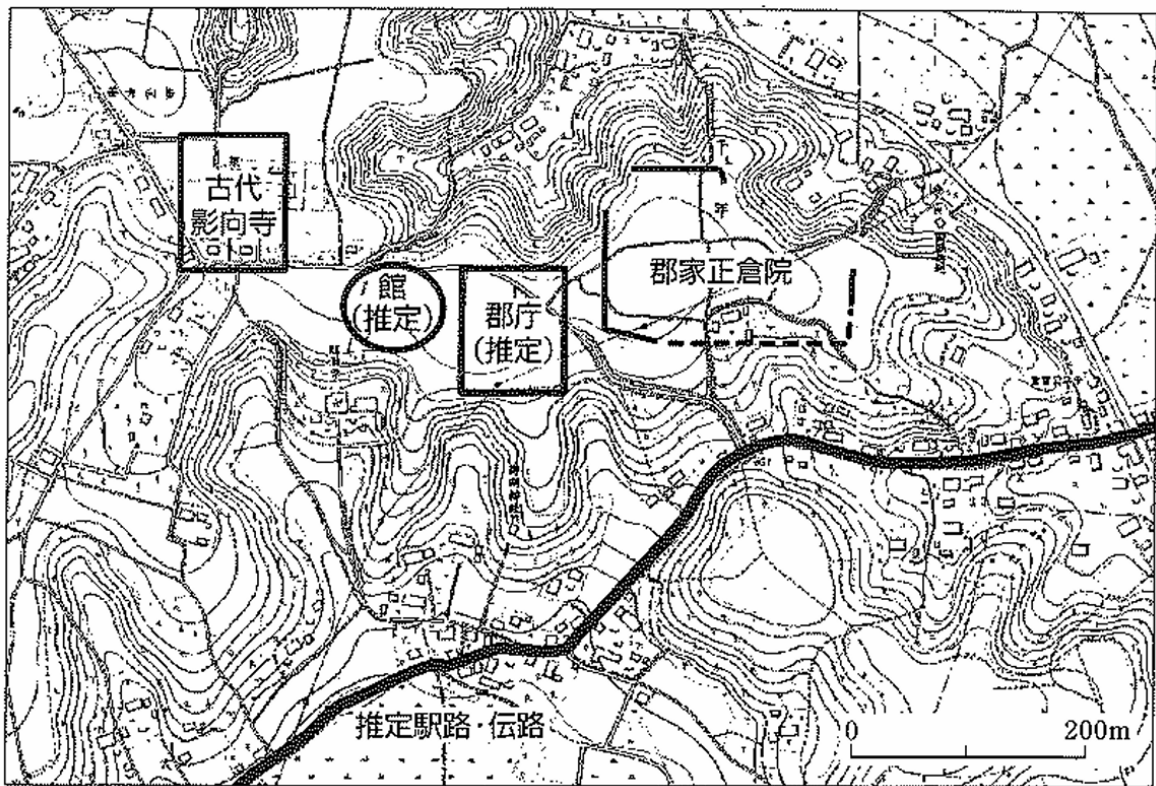
(田尾2017に加筆)



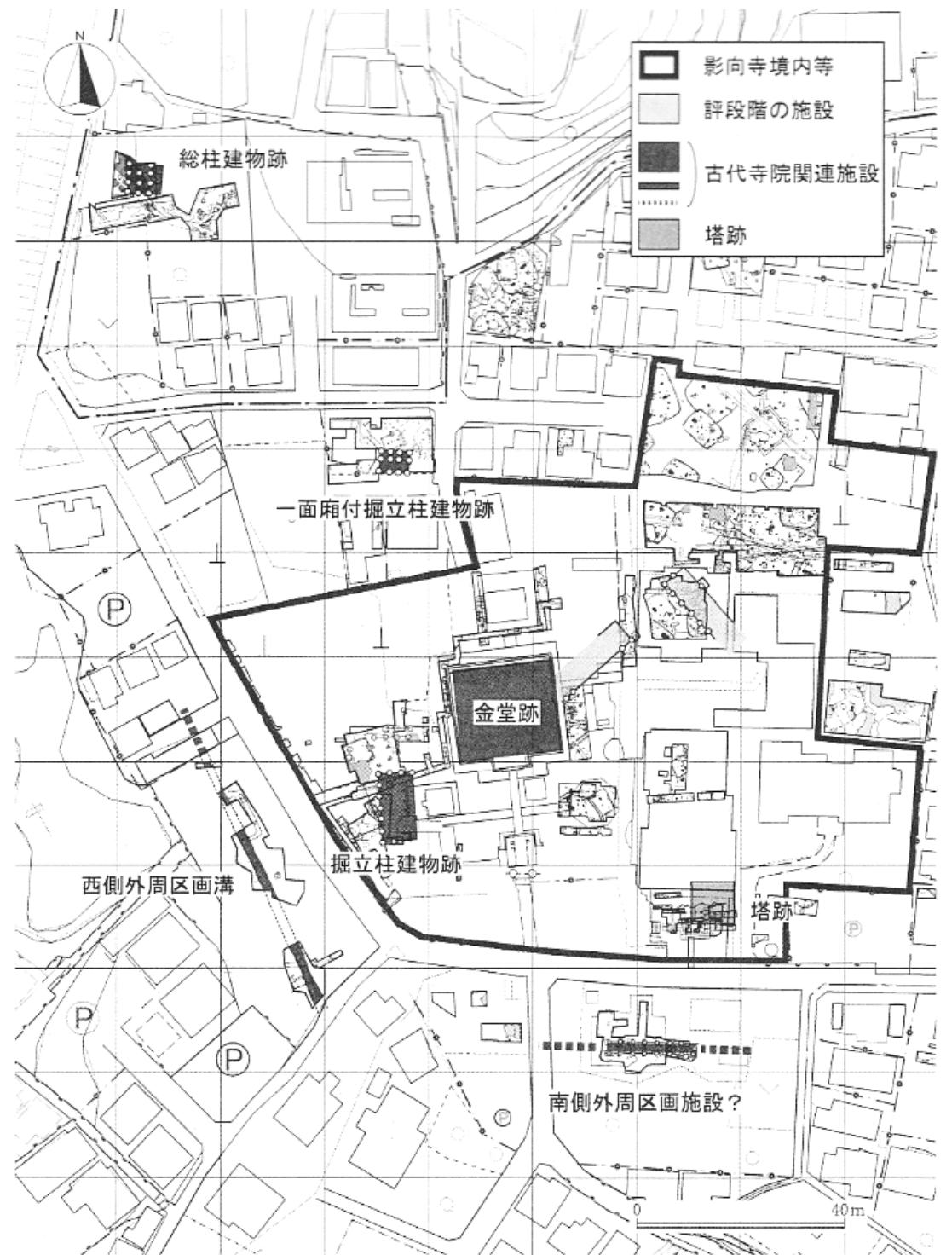
橘樹官衙遺跡群及び周辺の主な遺跡 (栗田2025)



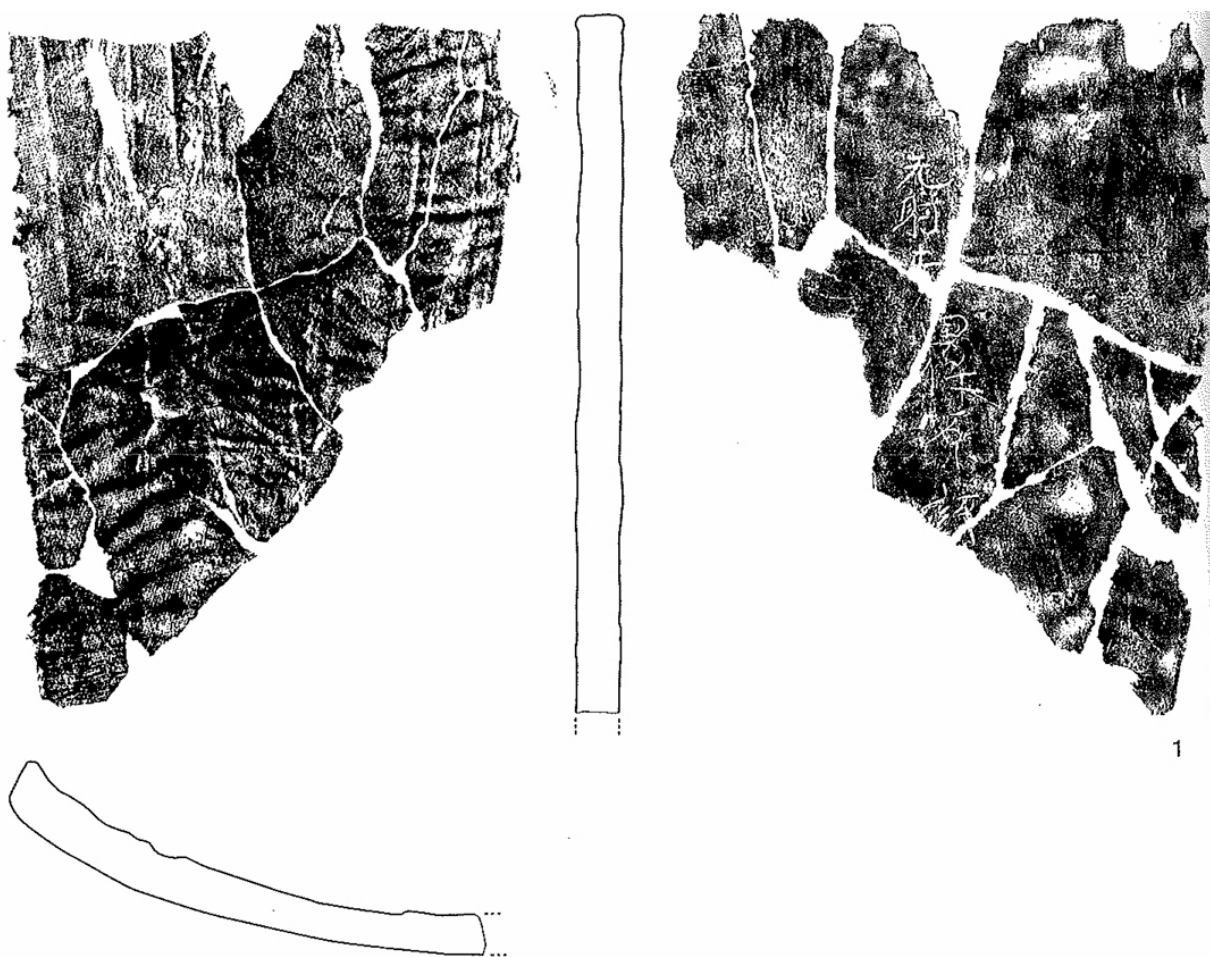
影向寺の軒瓦 (河野1997)



影向寺と周辺遺跡 (栗田2017)

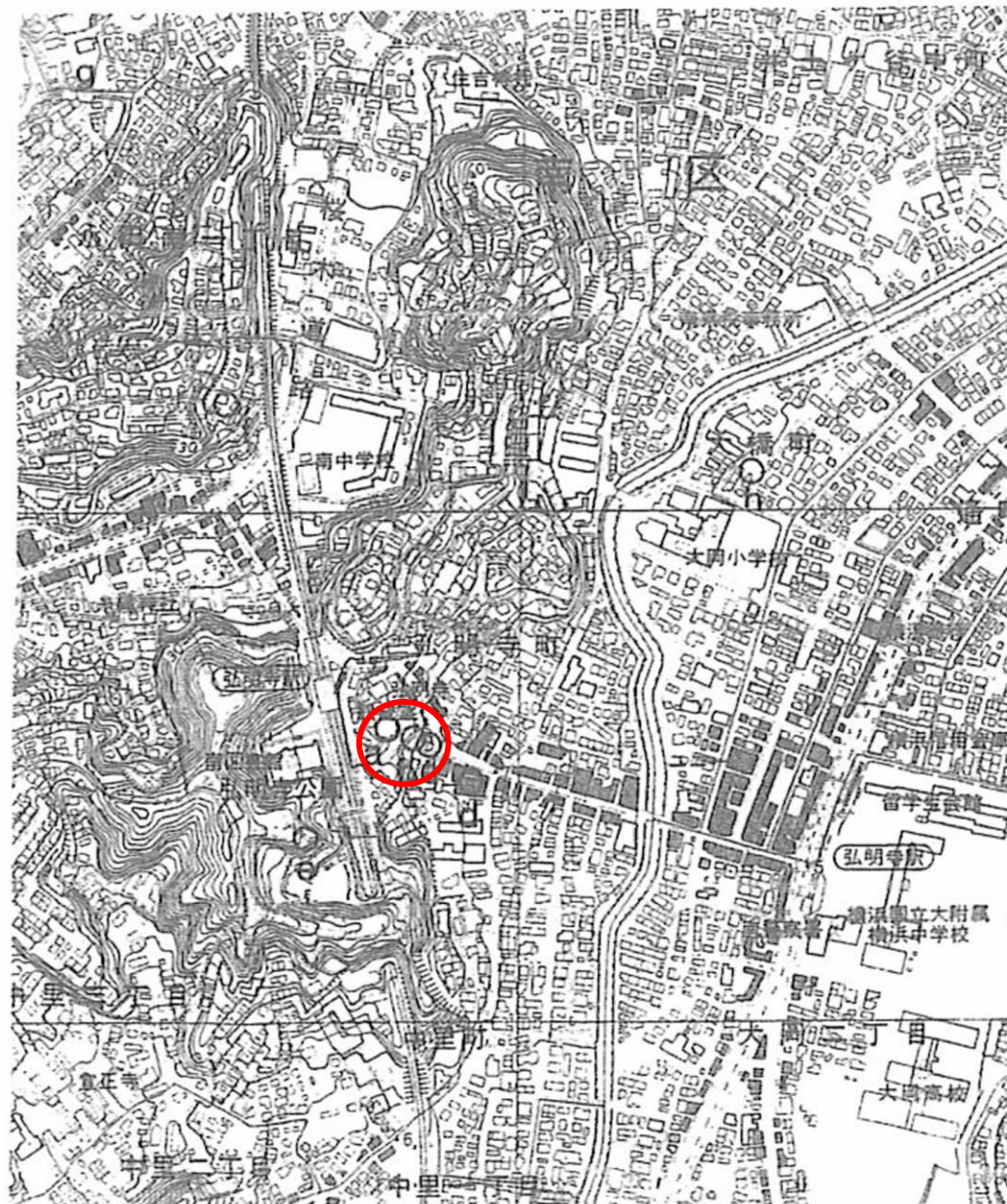
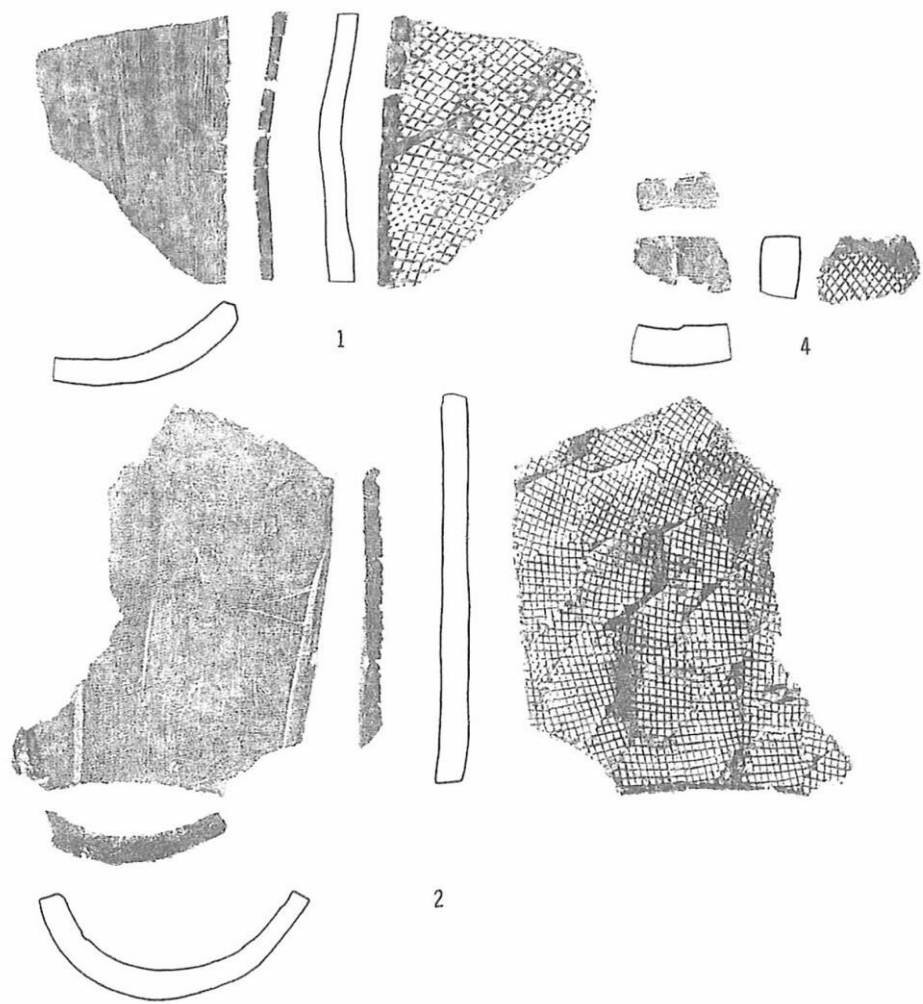


古代の影向寺関連施設等想定配置図 (栗田2025)

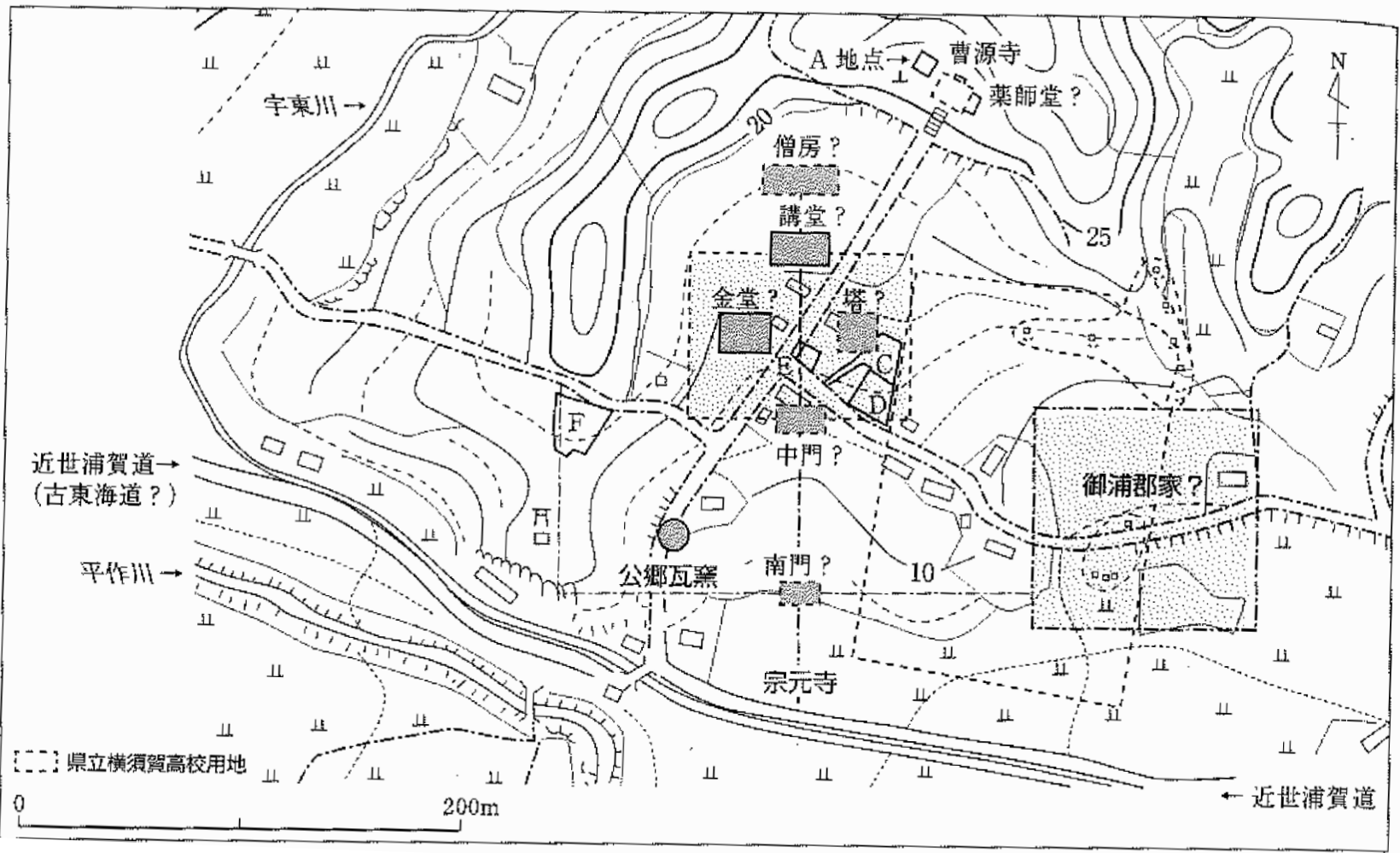


无射志国荏原評銘文字瓦

(川崎市教育委員会2014)



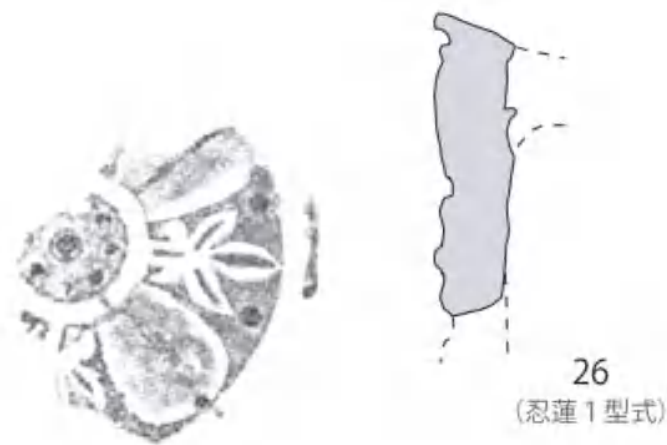
弘明寺の平瓦と位置図（岡本孝之・國平健三・田代昭夫2001）



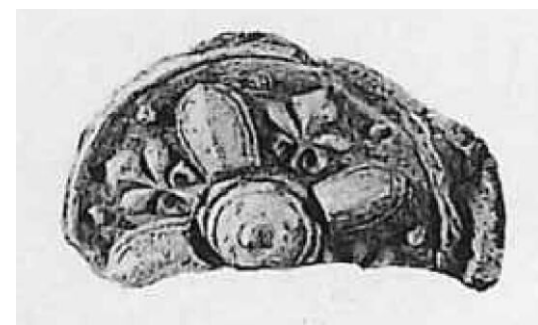
宗元寺想定配置図（田尾2017）



宗元寺の軒丸瓦（河野1997）



西安寺の軒丸瓦（王寺町2023）



高句麗の軒丸瓦  
（國學院大學考古学資料館2002）



1 枠板が一段低い部分（写真手前）に分割の目安となる紐がついている。

3 写真では1人で作業しているが、飛鳥時代などの大型の平瓦製作時には2人で粘土板を巻いていた可能性がある。



5 桶を内側に縮めて引き上げる。



6 布を取り出し、乾燥させた後に天地返しをする場合がある。



平瓦桶巻作り製作工程（京都市文化財保護課2019）



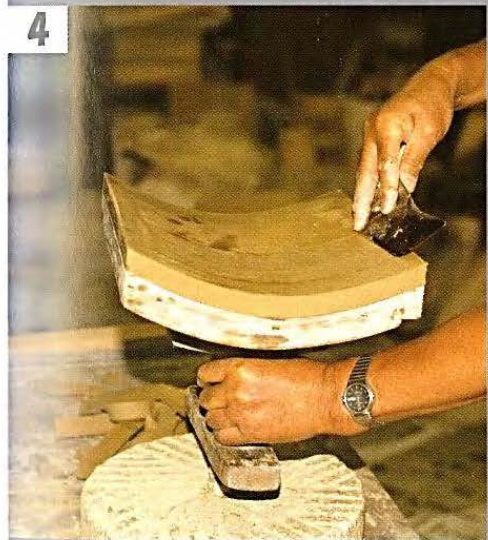
1 荒地を調整台にのせる



2 たたき締めながら形を整える



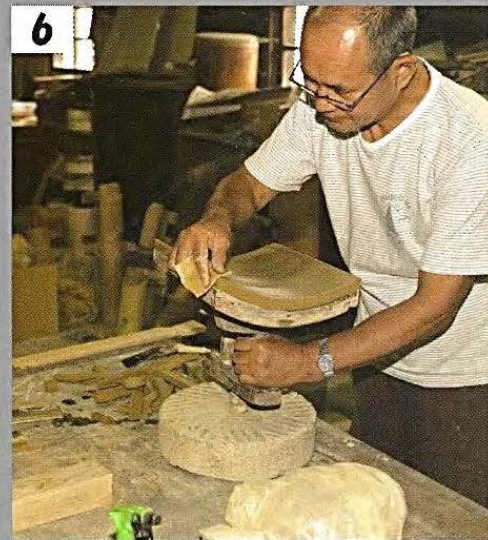
3 余分な粘土を切り落とす



4 カマで表面をなでる



5 ナデ板で表面をなでる



6 カワ（鹿革）で面取りを行う

現在の平瓦製作工程（京都市文化財保護課2019）



1 范に枷型（木枠）を嵌め込み、粘土を押し込む。  
あらかじめ近くに丸瓦を用意しておく。



2 半乾きの丸瓦を粘土詰めした上部に押し当てて接合させる。  
この時、焼成後の丸瓦の剥離を防ぐため裏面に補足粘土を加えることがある。



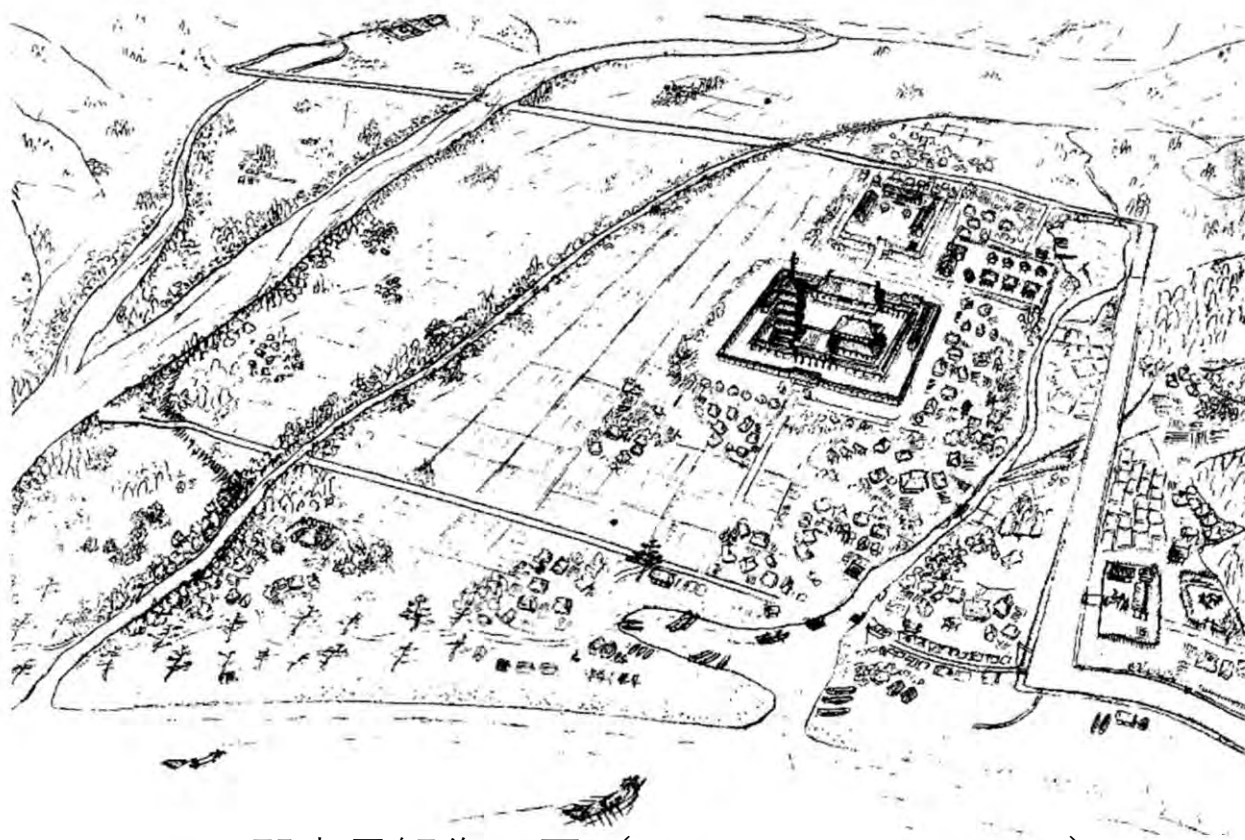
3 左右の木枠を外し接合部が離れないように、ナデ板で丁寧に整える。



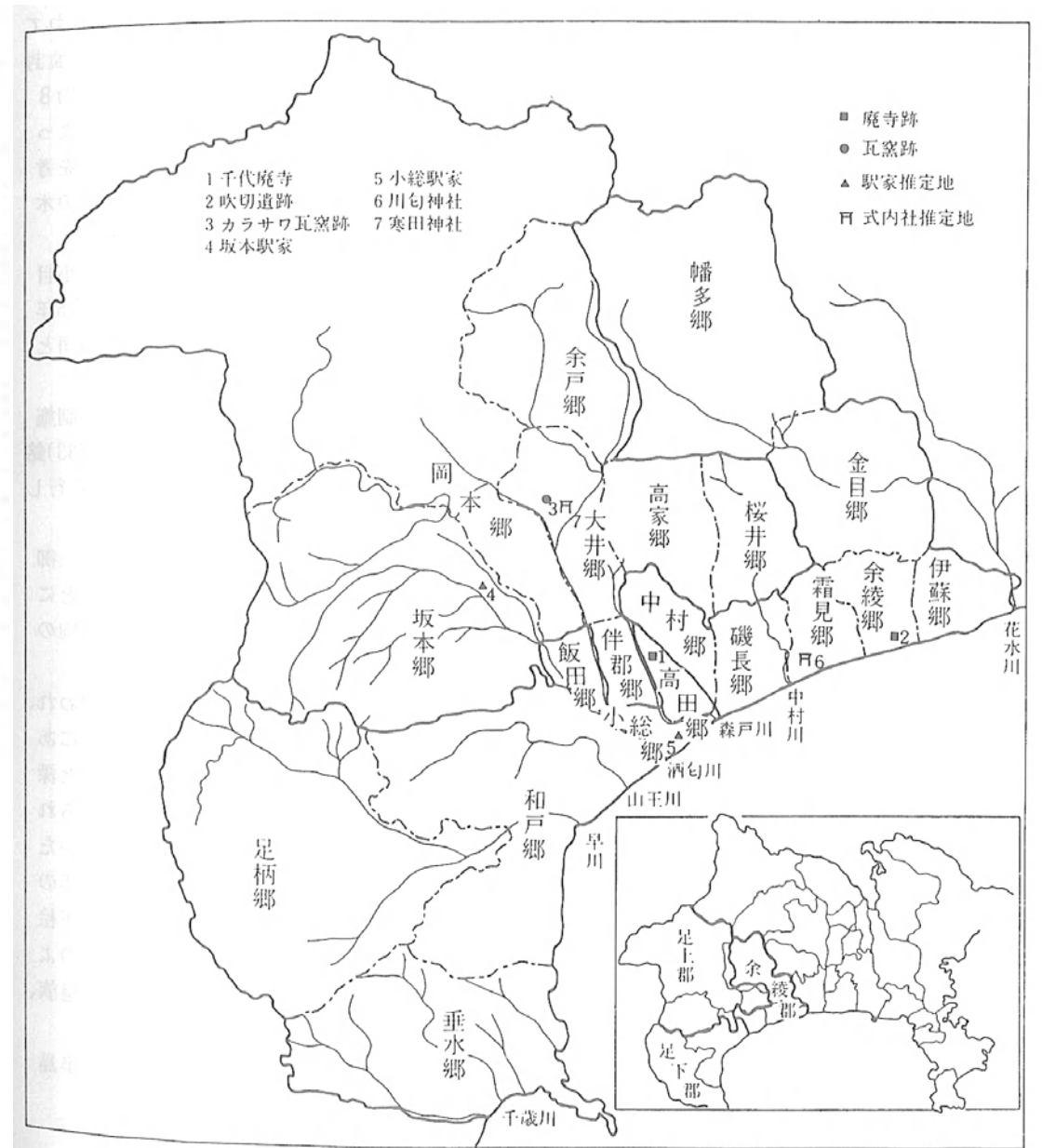
4 形が崩れないように、范からはずして整える。

軒丸瓦製作工程（京都市文化財保護課2019）

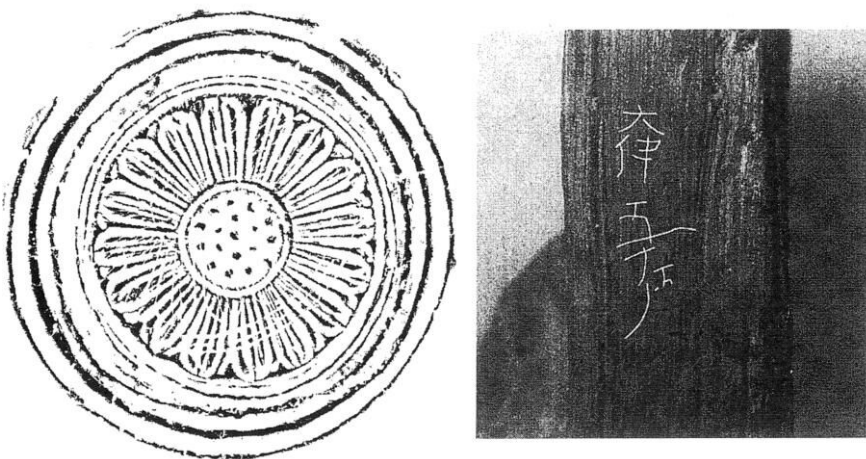




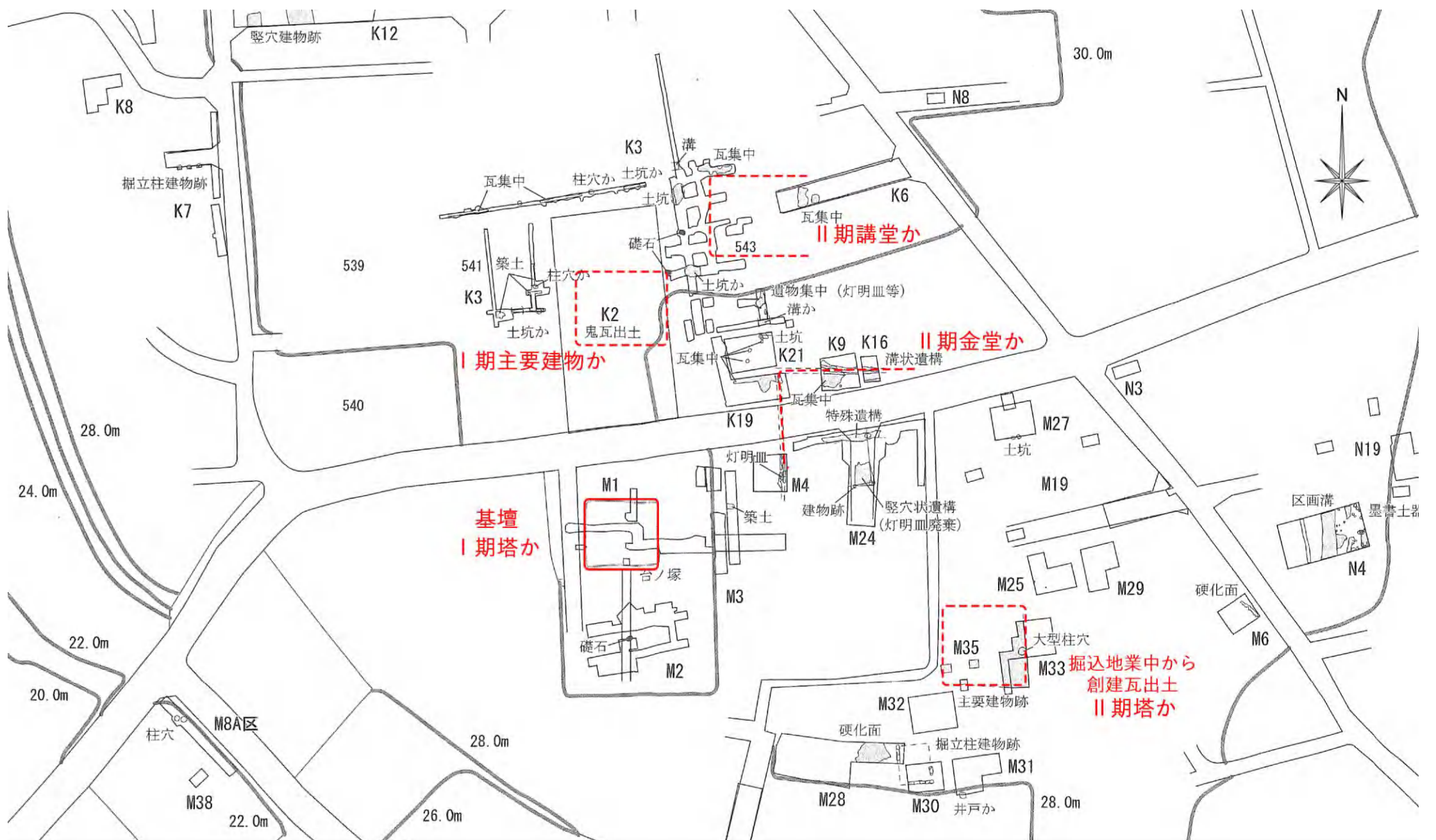
足下郡家景観復元図 (田尾2017・大島慎一画)



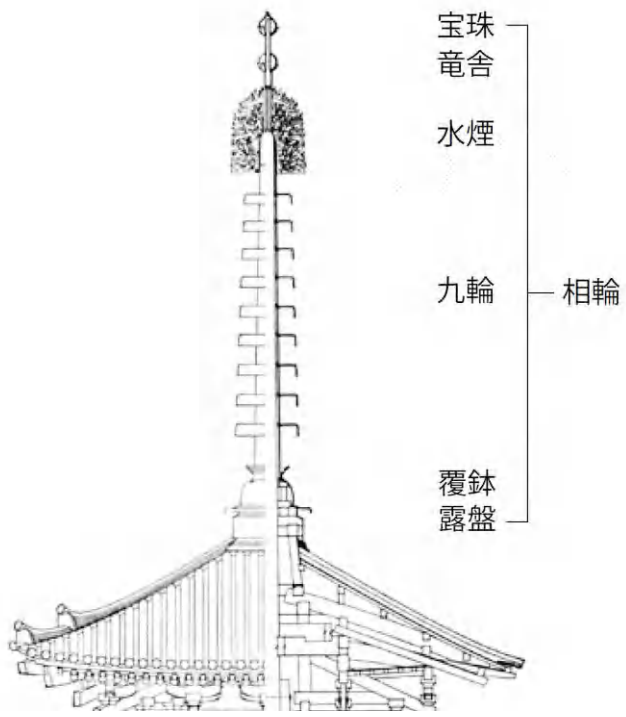
足上・足下・余綾郡と主要遺跡 (河野1997)



「大伴五十戸」軒丸瓦 (小田原市教育委員会2009)



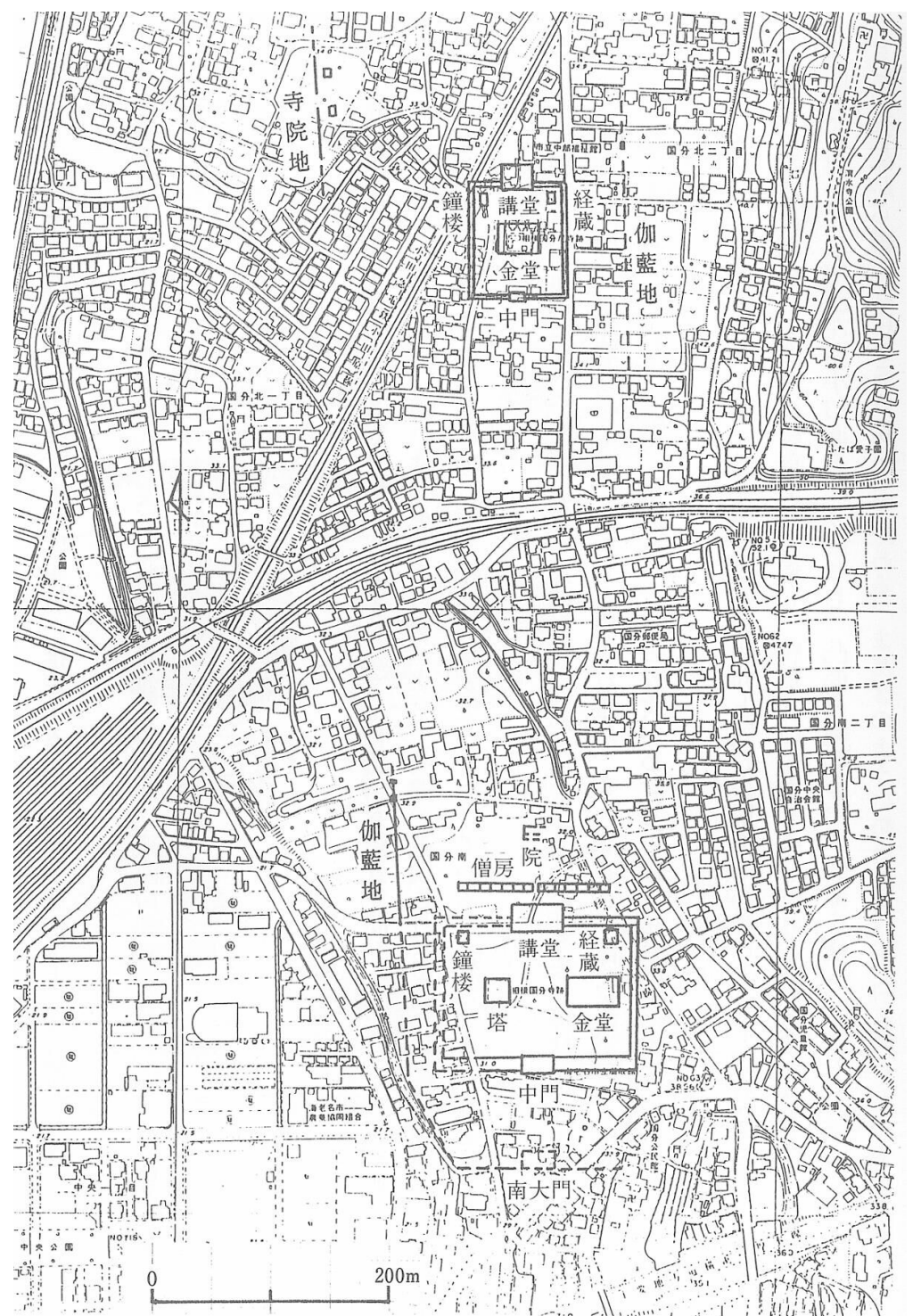
千代廃寺伽藍配置想定図 (小田原市教育委員会2017を基に作成)



薬師寺東塔立面・断面図  
(奈良文化財研究所2022)



相模国分寺塔跡出土水煙  
(神奈川県立歴史博物館2008)

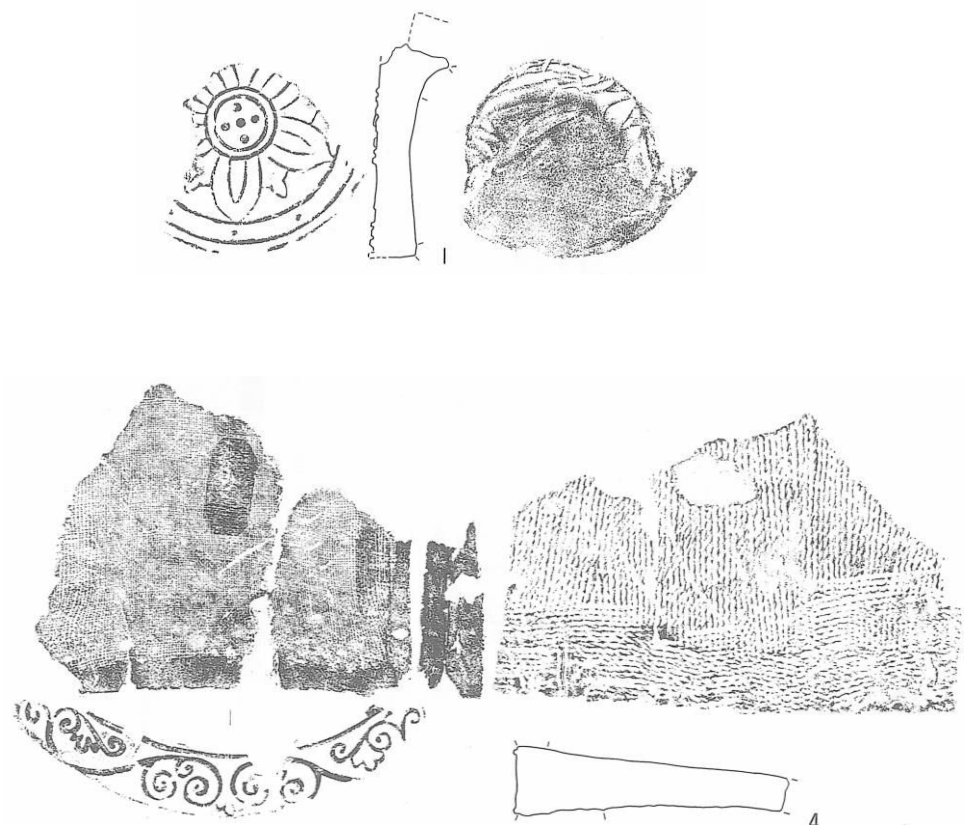


相模国分二寺関連図 (河野1998)



武蔵国分寺の郡名瓦

(しもつけ風土記の丘資料館1994に加筆)



相模国分僧寺の軒瓦 (河野1998)



瓦塔 (神奈川県立歴史博物館2008)